令和7年度　学校評価

「あきた型学校評価システム」による自己評価

令和8年3月

秋田県立西目高等学校

目　次

学校経営方針及び今年度の重点目標・・・・・・・・・・・・・１

系列
　文理系列・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２
　農業科学系列・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
　土木系列・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４
　ビジネス会計系列・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５
　教養文化系列・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６

業務部
　総合学科部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７
　総務部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８
　教務部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・９
　生徒指導部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０
　進路指導部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１
　特別活動部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２
　図書部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１３
　保健環境部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４
　研修部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１５
　情報視聴覚部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１６
　農場部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１７

学年部
　１年部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１８
　２年部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１９
　３年部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２０

教科
　国語科・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２１
　地歴・公民科・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２２
　数学科・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２３
　理科・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２４
　保健体育科・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２５
　芸術科・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２６
　英語科・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２７
　家庭科・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２８
　情報科・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２９
　農業科・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３０
　工業科・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３１
　商業科・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３２

学校経営方針及び今年度の重点目標

秋田県立西目高等学校

1　教育目標

「自彊不息」（じきょうやまず）の精神のもと、心豊かで高い志にあふれる人材を育成する。

（１）自ら学ぶ意欲を培い、情操豊かで創造性に富む人間の育成を図る。
（２）勤労と責任を重んじ、郷土の発展に貢献する人間の育成を図る。
（３）心身ともに健康で、思いやりのある心豊かな人間の育成を図る。
（４）社会の変化に柔軟に対応し、逞しく生き抜く人間の育成を図る。

2　教育方針

（１）豊かな人間性を育み、社会を生き抜く資質と能力を育成する。
（２）基礎学力の定着と、専門的知識や技能を身に付ける。
（３）総合学科の特色を生かし、多様な能力や適性に対応した教育を推進する。
（４）地域に信頼される活力に満ちた魅力ある学校づくりに努める。

3　今年度の重点目標

「主体性を育み人間力を高めるキャリア教育の推進」

（１）社会・対人関係力の向上
　①　規範意識を高めさせ、公共心を育てる。
　②　コミュニケーションスキルを身に付けさせ、他者を尊重し切磋琢磨しながら互いに高め合う力を育てる。
（２）高い志を持った進路目標の達成
　①　学習環境の確立により基礎学力を定着させ、応用力として論理的思考力の構築を図り進路実現に資する。
　②　学校を取り巻く先輩方の講話を聴くことにより自己啓発を促す。
（３）探究活動と特別活動の融合
　①　学校行事、生徒会活動、部活動、ボランティア活動への積極的な参加を促す。
　②　探究活動と体験的な学習活動をリンクさせ充実を図る。
（４）総合学科としての新しい地域連携
　①　地域社会の発展に寄与するために何ができるかを模索させる。
　②　自身が関わっている地域を愛する心を育てる。

評価領域	文理系列

重点目標	普通教科の科目を中心に選択し、人文・社会・自然科学分野の基礎を学び理解を深めるとともに、受験に対応できる能力と態度を養成する。	P
現　　状	明確な目標を早期（低学年）に設定できずに、３年次で安易に進路を変えてしまう生徒はいるが、早い時期から明確な進路目標をもち、努力しようとする生徒は徐々にではあるが増えているように思える。	
具体的な目標	(1) 進路目標に対応した、適切な科目選択の指導・助言に努める。 (2) 受験に対応できるわかる授業を目指して、生徒の実態や進路希望を踏まえた指導法を工夫する。 (3) 課外補習や添削等の個別指導、各種試験の事前・事後指導を徹底する。 (4) 学習ガイダンスや科目選択、模試分析等を通じて、教科・学年・進路指導部の連携を支援する。	
目標達成のための方策	・面談の充実（志望先や学習状況についての確認・助言） ・模擬試験等の有効活用（個別の成績状況の把握、各教科の事前事後の指導） ・受験に関する知識・情報の提供（幅広い選択肢からの適切な選択）	
具体的な取り組み状況 (1～2月記載)	学年部と教科担当による定期的な模擬試験や課外補習によって、生徒の学力向上と進路実現に向けた個別的な教科指導が行われた。	D
達成状況 (1～2月記載)	模擬試験、課外補習など生徒の希望と実態に合う指導ができた。長期休業中の補習には生徒が良く参加できていた。	

自己評価 (1～2月記載)	B	もう少し進路指導部や各学年部と連携を深めても良いと思う。　３年生の進路実現が達成できて良かった。	C

評価基準　A：具体的な活動がなされ目標を達成できた　B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	A	個々の生徒の実態に応じた丁寧な指導は、３年生の早期進路実現に結び付いた。	C
自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策（学校評議員会終了後記載）	今後も生徒一人ひとりの状況や変化を鋭敏に捉え、実態に即したきめ細かな指導を継続していく。特に、学年部内での情報共有の質をより一層高めることを課題とし、個々の生徒に対する理解を深め、学年全体での支援・指導体制を構築できるよう、他教員との緊密な連携に努めていきたい。		A

評価領域	農業科学系列

重点目標	県や地域振興局（地元篤農家）と連携し、未来の農業者としての勤労観・職業観の育成を目指し、的確な進路選択ができるようにする。	P
現　　状	現３年生はこの４月まで就農希望者が居ない状況だったが、就農に意識が変わり始めた生徒もいる。２年生は将来的に農業に携わる進路希望者は無し。１年生はまだ明確には決めてはいない様子ではあるが、就農に興味のある生徒は数名いる。	
具体的な目標	(1) 県農林部と連携し、高度化事業をなるべく多く企画する。 (2) 地域振興局と連携し、就農セミナーや地元起業や篤農家と連携したインターンシップを行う。	
目標達成のための方策	(1) 系列の事業を４つ以上企画し、生徒達に選択の幅を広げる研修を行う。 (2) 各種就農セミナーやインターンシップへ参加し、直接農業体験をすることで就農の魅力や農業の現状を理解させる。	
具体的な取組状況 (1～2月記載)	(1) 系列事業を27企画・参加した。これにより就農についての知識を深めることができた。特に、１・２年生は進路の一つに就農も考えたいという生徒が増えた。 (2) 就農セミナーやインターンシップにより、本校では授業体験できない「畜産」や「果樹」の体験ができた。	D
達成状況 (1～2月記載)	(1) 高度化事業参加により、１・２年生が就農に興味をもつ生徒が増えた。また、新１年生の農業科学系列選択者が増え、少しずつ「将来は就農という選択肢も有り」と答える生徒が増えた。 (2) 就農セミナーには全員が参加し、進路の一つに就農やフロンティア研修を考える生徒達が増加した。	
自己評価 (1～2月記載)	A (1) あらゆる事業の企画・参加により、就農の様々な方策を知ることができた。農業系の大学に１名進学し、将来は就農の予定である。また、雇用就農２名、林業関係就職者を出すことができた。 (2) 就農セミナー・インターシップに参加して終了ではなく将来的な就農について継続して取り組んでいきたい。	C

評価基準　A：具体的な活動がなされ目標を達成できた　B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	A	将来の就農につながるよう、様々な取組をしていることに熱意を感じた。農業の魅力をもっと知らしめて欲しい。	C
自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策（学校評議員会終了後記載）	雇用就農者を今後は外部講師として招く事業を行い、一人でも多く就農に結び付ける指導を計画的に行いたい。また、アグリセミナーや就農セミナーを効果的に実施するとともに、地域振興局、県農政部、地域企業等と連携したインターンシップを展開し、生徒の農業系進路の実現に向けた指導を工夫して取り組んでいきたい。		A

評価領域	土木系列

重点目標	地域振興局と由利建設業協会と地域との連携を密にし、明確な進路意識や職業観の育成を目指し、工業（土木系）への積極的な進路選択ができるようにする。		P
現　　状	昨年は公務員１名であった。今年度は６名の希望者がおり、県外の公務員を希望している生徒もいる。地元定着を見据えて、１年次から目標を定めて着実に学力を高める必要がある。		
具体的な目標	・就職と公務員希望者全員第一希望への合格。 ・授業を展開しながら国家試験合格率を全国平均より高い測量士補40％、２級施工管理技術80％の合格率の達成を目指す。		
目標達成のための方策	・地域振興局と建設業協会連携した事業を実施し体験させる。 ・これまで３年次から取り組んできた資格取得を１年次からの授業で取り入れ、模擬試験等で確認しながら授業を展開する。		
具体的な取り組み状況 (1～2月記載)	・３年生の就職希望者との面談を実施する。地域行事の測量大会や現場見学を年間で２回以上実施できた。公務員由利本荘市土木、国土交通省への合格を達成することができた。 ・ジュニアマイスターブロンズを達成することができた。		D
達成状況 (1～2月記載)	・昨年に引き続き測量士補１名合格することができた。２級土木施工管理技術は残念ながら合格することができなかった。今後も更に新しい仕掛けを試みていきたい。		
自己評価 (1～2月記載)	B	国家資格を５名以上合格者数とすること、ジュニアマイスター受賞者を増やすことを目標としたい。	C

評価基準　A：具体的な活動がなされ目標を達成できた　B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	B	昨年に引き続き測量士補合格者を輩出することができた。今後も頑張って欲しい。	C
自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策（学校評議員会終了後記載）	・地元の建設や測量会社では、ほとんど新人が入ってこないと嘆いており、地域の会社への就職を増やして欲しいという声がある。建設業界では資格者・技術者の育成は急務であると感じており、高校で取得した資格や技術を卒業後に活用させたい現状がある。 ・就職や資格取得について具体的な目標を設定し、今後も地域の産業をを支える人材の育成に努めてまいりたい。		A

評価領域	ビジネス会計系列

重点目標	商業の見方・考え方を働かせ、実践的・体験的な学習活動を行うことなどを通して、ビジネスを通じ、地域産業をはじめ経済社会での健全で持続的な発展を担う職業人として必要な資質・能力を育てる。	P
現　　状	・知識の差はあるが、自分ができることを考え、お互いに協力して解決しようとする姿勢がうかがわれる。 ・自分の役割を考えて行動している。	
具体的な目標	(1) 商業の各分野について体系的・系統的に理解するとともに、関連する技術を身に付けるようにする。 (2) ビジネスに関する課題を発見し、自ら学び職業人に求められる倫理観を踏まえ合理的かつ創造的に解決する力を養う。	
目標達成のための方策	・様々な場面を想定し、話し合いをすることで、より効果的な成果が出せるようグループ内でのディスカッションを進める。 ・実践を通してコミュニケーションの大切さ等を体験する。。	
具体的な取組状況 (1～2月記載)	・年間を通じた取組を振り返り、レポートにまとめた。 ・１年を通じて学習した内容を精査し、次年度に渡す内容をまとめた。 ・ビジネスにおける様々な学習を振り返り自分の今後の生活に活用できるよう振り返った。	D
達成状況 (1～2月記載)	・年間を通じた取組をレポートにまとめることができた。 ・総合的な探求の時間の発表が満足できるものになった。	

自己評価 (1～2月記載)	A	２年間の活動を通じ、ビジネスの体験や学習が満足できるものになった。	C

評価基準　A：具体的な活動がなされ目標を達成できた　B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	A	目的を達成させるためのプロセスが的確に行われ、生徒の自信につながったと思う。今後も継続していただきたいと思う。	C
自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策（学校評議員会終了後記載）	継続は力なりと考えている事業や資格取得がある。第三者から見られて評価していただけるよう、今後も継続して指導していきたいと考えている。		A

評価領域	教養文化系列

重点目標	社会的教養を高め、多様な生活や文化について総合的に学び、地域社会に貢献できる知識と意欲および実践力を身に付けさせる。		P
現　　状	選択できる科目はおおむね生活科学・芸術・その他教養という範囲が主体である。進路意識が未確立のまま選択する生徒も多いが、教養文化を選択した後で短大・大学進学を考え始める生徒も一定数いる。		
具体的な目標	能力適性、興味関心等の自己理解に努めさせ、進路目標を明確にさせる。生徒･保護者への積極的な情報提供に努め、適切な進路･科目選択を実現する。教科･科目間の連携を強め、一人一人の進路に合わせたきめ細かな指導を充実させる。		
目標達成のための方策	・系列ガイダンスやＨＰ上で公開している科目ガイドの等による情報提供。 ・各教科科目における授業内での意識向上と実践的授業の実施		
具体的な取り組み状況 (1～2月記載)	文理系列と共通化した授業を作ることにより、生徒数が減少する中でも開設できる科目を増やせるようにしている。また、生徒の希望を活かすため少人数の授業でもできるだけ実施している。		D
達成状況 (1～2月記載)	１年生教養文化系列の次年度選択科目を見ても、文理・教養文化共通科目で幅広く選択できるようになり、限定的であるが進学をある程度意識した科目選びができるようになった。		
自己評価 (1～2月記載)	B	過去に比べて普通科的な要素を増やすことができているが、教員定数の減少でもこの状態が維持できるかが課題である。	C

評価基準　A：具体的な活動がなされ目標を達成できた　B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	B	生徒減少の中で教員の負担も増えるが、生徒が実生活で行かせる意欲や実践力を身につけられるようにして欲しい。	C
自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策（学校評議員会終了後記載）	教養文化系列は本校の中でも自由度が高い選択科目の授業構成になっいる。しかし、これは授業によって希望生徒の偏りによる少人数授業や、希望者の過多による選択科目の変更などを伴うものである。受講人数の制限ができるだけ起こらないようにガイダンスを行うと共に施設の整備に関する働きかけも必要となる。		A

評価領域	総合学科部

重点目標	(1) 総合学科としての特色を生かす。 (2) 多様な選択肢から、自分の進路を考えられる主体性を育む。 (3) キャリア教育の視点から進路実現に繋がる教育を行う。 (4) 総合学科の円滑な運営を行い、生徒の活動の充実をはかる。	P
現　　状	(1) 各系列における学びの充実をはかっている。 (2) 系列・科目選択指導を学年部と連携して行っている。 (3) 学年部、進路指導部等と連携して学力向上、進路指導を行っている。 (4) 生徒が地域の発展に寄与する活動ができる環境を整えている。	
具体的な目標	・目標達成のために適切な系列および科目を選択させる。 ・本校の活動を地域に知ってもらい、地域社会との連携を深める。	
目標達成のための方策	・科目選択に関するガイダンスの充実と指導の徹底を図る。 ・「新志芽通信」を年度内で20号以上発行する。 ・地域産業祭（ゆりほんマルシェ）へ積極的に参加する。	
具体的な取り組み状況 (1～2月記載)	・１年生は４月と９月、２年生は９月にガイダンスを行った。 ・日々行われるイベントを「新志芽通信」に記録し、発行した。 ・11月に行われた地域産業祭へ参加した。	D
達成状況 (1～2月記載)	・系列・科目の選択は生徒・保護者ともに納得の上で決定できた。 ・「新志芽通信」は12月までで22号を発行した。 ・農業科学・ビジネス会計・教養文化の各系列が出店し好評を得た。	

自己評価 (1～2月記載)	A	生徒が安心して学校生活を送れるよう、また、生徒の活動の地域への発信および連携に尽力することができた。	C

評価基準　A：具体的な活動がなされ目標を達成できた　B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	A	地域イベントへの参加や「新志芽通信」による情報発信など、充実した活動が行われた。総合学科としての学校の取組や良さを地域に理解されるように努力してほしい。	C
自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策（学校評議員会終了後	・専門系列だけでなく、文理系列の「ロボットアイデア甲子園」への参加（東北大会出場）、教養文化系列の「ゆりほんマルシェ」への参加（オリジナルパンの開発・販売、アクセサリーの販売）など、全系列で地域へのアピール、生徒の活躍の場を広げる取組をしていきたい。 ・「新志芽通信」をベースとした情報発信の仕方を工夫していきたい。		A

評価領域	総務部

重点目標	関係諸機関との連携を図りながら、学校行事および渉外業務を推進し、ＰＴＡ、同窓会が円滑かつ効果的に機能するように努める。	P
現　　状	・行事（学校行事、ＰＴＡ、同窓会行事等）については、先々の予定を見通しながら準備、調整を進めており、滞りなく進められている。 ・保護者への出欠確認や資料配付を、配信等で行うなどＩＣＴ利用の拡大を検討している。	
具体的な目標	(1) 学校行事(特に儀式的行事）の円滑な運営を図り、充実した成果を収められるように努める。 (2) ＰＴＡ役員等を通じて保護者との連携強化を図り、的確な情報発信に努める。 (3) 学校とＰＴＡ、同窓会との密接な連絡調整に努める。	
目標達成のための方策	・危機管理マニュアルや諸規程集等の改訂と周知を進める。 ・学校配信システムの有効活用を進める。 ・進路指導部と連携し、生徒の進路活動に対するＰＴＡや同窓会への協力を依頼し、面接指導等を実施する。	
具体的な取り組み状況 (1～2月記載)	・学校安全計画、危機管理マニュアルの改訂。校内諸規程の改訂検討。 ・「すぐーる」登録状況の掌握。出欠連絡および緊急時対応、行事等の通知や出欠管理等の活用。 ・ＰＴＡによるプランター設置、あいさつ運動、就職者への面接指導、学校祭の出店等の運営等。	D
達成状況 (1～2月記載)	・総務部主催の学校行事は現在まで滞りなく進行している。 ・現状を鑑み、クマ出没時の対応や不審者対応等、マニュアルを改訂した。校内諸規程の見直しを現在進めている。 ・予定していたＰＴＡ活動は、ＰＴＡ役員の協力により大変活発に運営することができた。	

自己評価 (1～2月記載)	A	目標は概ね達成できている。学校配信システムをさらに有効活用していきたい。	C

評価基準　A：具体的な活動がなされ目標を達成できた　B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	A	・学校行事やＰＴＡ活動への取組がしっかりしている。 ・ＰＴＡや同窓会との連携、実情に合わせた計画や規定改訂等（クマ出没等)、スムーズな学校運営に寄与している。	C
自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策(学校評議員会終了後記載)	ＰＴＡ活動は、多数のＰＴＡ役員の協力、参加の下に実施できた。保護者による面接指導会やプランター設置においては、マンパワーが足りていない点も否めないが、生徒、保護者、地域が交流できる貴重な場面でもあり、継続可能な方法を検討しながらぜひ継続させたい。 また今年度の状況を鑑み、危機管理マニュアルのクマ出没時の対応や不審者対応の部分を改訂したが、今後も現状に合わせたマニュアルの改訂や校内諸規程の見直しを進めていきたい。		A

評価領域	教務部

重点目標	・学習環境の整備と授業時数の確保に努める。 ・効果的な教育課程を編成する。また、そのための各種統計資料等の分析をする。 ・各種システム（校務支援、すぐーる、デジタル採点）の運用管理に努める。 ・新教育課程に対応した評価について、職員の共通理解を図る。	P
現　　状	・系列別授業や選択授業が多く授業交換が難しいため自習対応が多い。 ・日々の出欠入力に関しての未入力や誤入力がある。 ・主体的に学習に取り組む態度に関する評価について、教員間に大きな差が見られる。	
具体的な目標	・自習を減らすことで実質授業時数を確保する。自習時間の生徒の取組の向上を図る。 ・校務支援システムでの入力規則を周知し、誤入力を防ぐ。 ・各教科ごとに評価方法を再確認し、共通理解を図る。	
目標達成のための方策	・代行授業での対応を増やす。自習監督者が責任をもって学習に取り組ませる。 ・出欠入力に関する問題点を確認し、入力規則について共通理解を図る。入力後のチェックを教務部で行う。 ・各教科で評価に関して問題点がないか点検し、必要があれば見直しを行う。	
具体的な取組状況 (1～2月記載)	・代行授業よりも自習課題での対応が主であった。課題の準備については問題なく行われている。 ・考査ごとに出欠の入力状況を確認し、誤入力や未入力についての修正対応を確実に行っている。 ・各教科で評価規準に基づいて観点別学習状況評価が行われている。	D
達成状況 (1～2月記載)	・急な自習にも教科内での課題準備や代行授業が行われている。 ・出欠入力について正確なデータの保存に努めている。 ・教科の特性や生徒の実態に合わせた評価が行われている。	

自己評価 (1～2月記載)	B	各種システムの運用について問題はない。指導要録の表記の統一、校務支援システムの出欠入力内容の周知徹底を行った。	C

評価基準　A：具体的な活動がなされ目標を達成できた　B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	B	各種システム運用への理解が深まっている。毎日の出欠について未入力等があるのは基本的におかしいのではないか。	C
自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策（学校評議員会終了後記載）	・各種システムへの理解を深める。特に、校務支援システムを担当できる職員を分掌内で増やし、担当者が異動になった場合でも対応できるようにマニュアルや資料を整理する。 ・出欠入力について、当日のうちに確実に入力を完了させる。各職員において習慣化されるまでは、教務担当者がチェックし、教科担当者へ連絡する。		A

評価領域	生徒指導部

重点目標	挨拶・言葉遣い・整容・立ち居振る舞いの指導を徹底し、基本的生活習慣の確立に努める。また、問題行動が起こらないよう、情報発信や生徒の観察をする。		P
現　　状	一定数の遅刻する生徒が見られる。また、整容については女子の制服の着崩しやメイクなどが一時期より多くなっている感がある。対策の一つとして、毎朝昇降口でのあいさつや整容の指導を実施したり、節目の時期を中心に整容検査を実施したりして、身だしなみの指導をしている。人間関係のトラブルは見られるが、比較的初期の段階で把握・対応できている。		
具体的な目標	・整容指導や挨拶等に関する日常の指導を継続して行う。 ・問題行動を未然防止するための情報発信や生徒の観察をする。 ・いじめアンケートの実施と事後指導をきめ細かく行う。		
目標達成のための方策	・教師間で共通理解を図り、情報を共有して全職員で指導する。 ・各学年部や各分掌との連携を密にし、問題やその兆候があった場合は迅速かつ適切な対応をする。 ・アンケートや面談などによる生徒の状況把握を積極的に行う。また、職員間で情報を共有し、速やかに協力しながら対応する。		
具体的な取組状況 (1～2月記載)	・例年どおり朝の昇降口指導を継続している。 ・ＳＮＳ等のトラブルに関する注意喚起を集会等で行っている。 ・年２回のいじめに関するアンケートの実施。		D
達成状況 (1～2月記載)	・女子のスカート丈など整容の乱れが例年より気になる。 ・いじめに関するアンケートが人間関係トラブルの早期発見・早期対応につながっている。		
自己評価 (1～2月記載)	B	ＳＮＳトラブルやいじめをゼロにすることは難しいと思うが今後も未然防止対策と早期発見・早期対応を充実させたい。	C

評価基準　A：具体的な活動がなされ目標を達成できた　B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	B	・挨拶、言葉遣い、整容、立ち居振る舞いは、社会人になってから当然本人に跳ね返ってくるものであり、学生時代にしっかり身に付けてほしい。 ・ＳＮＳトラブルに対応が見られる。 ・ＳＮＳのトラブルやいじめの早期発見に根気強く取り組んでほしい。	C
自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策(学校評議員会終了後記載)	人間関係をうまく構築できない生徒が増えている中で、いじめやＳＮＳのトラブルが継続的に見られていることから、早期発見策を充実させたい。そのために、教職員間の連携を密にし情報の共有に努めたい。また、「いじめに関するアンケート」の実施はいじめの早期発見・早期対応に効果的だったと感じているので継続したい。		A

評価領域	進路指導部

重点目標	「自彊不息」の精神を忘れず、自己を励まし、継続して努力を続けることで、社会の変改に対応して生き抜くことのできる人材を育成する。		P
現　　状	全体としては、まだ総合学科や専門系列の強みを十分に生かし切れているとは言えない。また、個人としては自己理解や他者理解、思考力が不十分である。そのため、主体的に進路目標を設定したり進路先を研究したりすることができず、安易な方向に流されやすい傾向がある。		
具体的な目標	・主体的な進路活動を促し、進路達成率100%を実現する。 ・総合学科の特色を生かした入試での大学進学者や就職者を増やす。		
目標達成のための方策	・データ等を効果的に活用しながら「理想」と「現実」の距離感を生徒と教師で共有し合い、問題解決のために取り組んでいく。 ・就業体験や各種進路行事を通じて専門性を生かせる進路先の情報を伝えるなど、その魅力を積極的に発信する。		
具体的な取り組み状況 (1～2月記載)	進学者向けには教育資金講座やスタサポ分析会、進路別ガイダンス等を実施し、就職者向けにはクレペリン検査や面接指導会、企業情報説明会等を実施した。		D
達成状況 (1～2月記載)	前述したような取組は、卒業後の具体的な姿をイメージさせることはもちろん、進路達成までの道筋を明示させることにもつながったと思う。また、担任の先生方のがんばりもあり、12月までに進路達成率100%を実現することができた。		
自己評価 (1～2月記載)	B	結果としては素晴らしいものだったが、進路指導部と学年部との連携には課題が残る。	C

評価基準　A：具体的な活動がなされ目標を達成できた　B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	A	総合学科の特色を生かした進路実現につながる様々な取組は、成果につながってきていると感じる。更なる教員間の連携が今後も重要である。	C
自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策(学校評議員会終了後記載)	教員間の連携に関しては、率直な意見をお話しさせていただくと、完璧な連携の形が出来上がったとしても、教員個人の意識が変化しない限りは砂上の楼閣なのではないかと思う。働くことに対する意識変革が教員全体にもっと起きなければ、更なるよい結果は望めない気がする。進路指導は進路指導部だけでなく、学校全体で行うべきものであるにも関わらず、教員間や学年間で非常に温度差を感じる。		A

評価領域	特別活動部

重点目標	望ましい集団生活を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図ることができる。西目高校生として誇りを持って校内外で躍進しようとする積極的な態度を身に付ける。	P
現　　状	ＨＲ担任・部活動顧問の働きかけによって、全体的には学年を追って生徒の心身の成長が見られる。部活動は生徒数減少の影響もあり厳しい状況である。諸学校行事においては、生徒会執行部をはじめ各委員会の意欲的な参画が見られるなど、組織的な取組がある。	
具体的な目標	(1) 学校行事、生徒会活動、部活動などへの生徒の積極的参加を促し充実させる。 (2) 生徒会活動や部活動を通して、整容面や行動面の生活向上を促進し、社会人として求められる規範意識や公共心を育てる。 (3) ボランティア活動など地域貢献・社会参加の活動推進を図る。	
目標達成のための方策	・１年生全員の部活動体験の実施。 ・新志芽祭において生徒会執行部を中心としたルール作り。 ・全校の連帯感を強めるための全校応援の実施。 ・ボランティア活動の情報発信と呼びかけによる参加者の広がり。	
具体的な取り組み状況 (1～2月記載)	・１年生全員の部活動入部体験。 ・各種学校行事の計画と生徒の自主的活動の促進。 ・壮行会、全校野球応援、全校サッカー応援の実施。 ・運動部活動の大会報告会の実施、賞状伝達式による奨励。	D
達成状況 (1～2月記載)	生徒数の減少により部活動加入者数も減少している中、加入率は微増傾向にある。各種行事については、担当者間で日程や内容を適宜検討しながら、予定通りに実施できている。生徒は部活動や学校諸行事、課外活動を通して、西目高校生として誇りをもち、躍進しようとする積極的な態度が見られた。	

自己評価 (1～2月記載)	B	多岐にわたる年間行事に対し担当者を割り振ったが、主要な行事の担当者の負担が大きくなった。特別活動部内でサポートし合う体制作りが必要と考える。	C

評価基準　A：具体的な活動がなされ目標を達成できた　B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	A	生徒数が減少する中でも、生徒の部活動やボランティア活動、学校行事への満足度は高く、取組の成果が出ている。	C

自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策（学校評議員会終了後記載）	・体育館入り口前に各運動部の目標を掲示するようになったが、今後は活動の成果も日常的に発信できるようにしたい。また、文化部や生徒会の活動の様子も生徒の目に止まるところに掲示し、部活動に興味をもたせ、加入率向上につなげたい。 ・大規模行事を数名のみに任せることはせず、複数名でサポートするよう調整を図る。行事運営に対するマニュアルを整備し、担当者が変わってもスムーズな運営ができるようにしたい。	A

評価領域	図書部

重点目標	読書に親しむ姿勢を育むとともに、教科学習や探究活動との連携を図り、メディアセンターとしての機能を備えた図書館の運営を目指す。	P
現　　状	・一部の生徒は利用しているが、読書習慣が身に付いている生徒は非常に少ない。 ・一人一台端末が浸透した現在、探究的な活動や教科横断的な活動において図書館が利用される機会は、ほとんどない。 ・教科や系列との連携も希薄である。	
具体的な目標	(1) 生徒からの情報発信を促すなど、委員会活動の活発化を図る。 (2) 教科や系列に対するレファレンス機能を充実させる。	
目標達成のための方策	・図書館利用の仕方について、オリエンテーションを実施する ・図書委員会の活動の一環として、一般生徒へ利用を働きかける。 ・教員への働きかけにより、系列や教科におけるニーズの掘り起こしを図る。	
具体的な取り組み状況 (1～2月記載)	・１年生を対象に、国語科と連携してオリエンテーションを実施した。 ・図書委員会企画として、五行歌コンクール（３年生）やビブリオバトル（１年生）を実施し、図書館報で紹介した。 ・図書委員会企画として、オススメ本のＰＯＰを作成し学校祭で展示するとともに、他校図書委員会とのＰＯＰ交流も実施した。 ・文化講演会に合わせて生徒玄関に特設コーナーを設置した。	D
達成状況 (1～2月記載)	・図書館利用が低迷し、全体的な利用増加には至っていない。 ・職員への働きかけやレファレンスサービスは不十分だった。	
自己評価 (1～2月記載)	B　図書委員会活動を通して生徒の意識付けや次年度への意欲につながった。授業や補習で利用される機会は増えたが、貸出本の増加には至っていない。継続的な取組が必要である。	C

評価基準　A：具体的な活動がなされ目標を達成できた　B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	B　図書委員会の充実はできているが、読書習慣の定着や図書館利用の向上を目指して継続的に取り組んで欲しい。	C
自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策（学校評議員会終了後記載）	・図書委員会の活動については、継続して取り組んでいく。 ・図書館利用や図書資料の購入について、系列や教科、２・３年生の探究活動等で活用しやすいよう積極的に働きかけていく。 ・移動図書や特設コーナー等、一般生徒が図書に触れる機会をつくることで、読書推進を図っていく。	A

評価領域	保健環境部

重点目標	生徒の健康保持増進のため健康管理体制を確立し、生徒の主体性を育て保健教育を推進する。	P
現　　状	・生徒は、心身の健康に対する意識が低く、健康な状態や自己管理の仕方に関する理解が浅い。心身の望ましい状態や衛生的な環境への気付きを促す必要がある。	
具体的な目標	・健康検査等を通して生徒の健康状態を把握し、検査事後措置の徹底を図る。 ・他分掌や教科との連携を図り、健康や環境に対する生徒の意識向上を図る。	
目標達成のための方策	・委員会活動の活性化と適切な清掃活動を促す。 ・保健だより、ＳＣだよりを発行する。 ・専門家、専門機関による指導内容を職員間で共有する。	
具体的な取り組み状況 (1～2月記載)	・保健委員会（感染症予防等を促すポスター作成や換気の呼びかけ等） ・生活美化委員（扇風機の管理、大清掃時の補助、掃除用具の点検等） ・保健だより（６回発行）、ＳＣだより（２回発行） ・ＳＣによる教育相談（計14件）	D
達成状況 (1～2月記載)	・委員会の顧問が中心となり各種健診や清掃活動が適切に行われ、美化意識や健康意識を高める活動を様々実施した。 ・保健だより等の発行で全体に対する健康意識の呼びかけもできた。 ・保健室を利用する生徒については、ＳＣの活用に加えて、心の状況等を把握し、担任や学年にフィードバックする体制も機能している。	

自己評価 (1～2月記載)	B	・感染の流行時期が例年に比べ速かったが、学校医と連携して対応することができた。 ・健康意識や美化意識の向上を目指して様々な啓蒙活動の継続が必要である。	C

評価基準　A：具体的な活動がなされ目標を達成できた　B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	B	これまでの経験を活かし、早期の感染対策において成果を上げている。「心のケア」についても、連携して体制整備を進めている点は評価できる。健康意識や美化意識の向上に向けた地道な取組は、今後も継続した取組を期待する。生徒一人ひとりが自覚をもち、健康を保持する習慣の確立を。	C
自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策（学校評議員会終了後記載）	・今後も感染症流行の可能性があるため、引き続き感染症予防に努めていく。 ・日常の清掃を徹底し、良好な環境を維持していく。		A

評価領域	研修部

重点目標	校内外での研修成果を共有して教育活動への活用を図り、組織的な授業改善を推進するとともに、教員の資質向上に資する。		P
現　　状	昨年度より新教育課程に沿って全学年の授業展開や評価基準の改訂に取り組んできた。生徒数に合わせカリキュラム編成も変わる中、生徒個々が探究する授業内容をより進化させて行く。		
具体的な目標	・総合学科の特色を互いの教科指導に反映し、生徒の多面的な学びにつなげるよう研修を進める。 ・生徒自らＩＣＴを積極的に活用できるように、教員のスキルアップを進める。（ＢＹＯＤへの対応） ・授業アンケート、感想等で生徒の反応を確認する。		
目標達成のための方策	・教科理解を深めるだけでなく、発想・発表のツールとしてなど様々な場面でＩＣＴの活用能力を高める。 ・進路指導など各種取組と連携し、生徒の学ぶ意欲を高めさせる。		
具体的な取り組み状況 (1～2月記載)	・土木・理科・体育・英語など多くの教科において研究授業を実施。 ・教科ごとに授業アンケート（前期、後期）を実施。 ・授業改善重点事項を各代表者により検討し、授業改善に取り組んだ。		D
達成状況 (1～2月記載)	・実践的指導力習得等各研修の実施。 ・救命救急講習会（教員、運動部員参加）の実施。 ・状況に応じ、多様な視点に基づいて様々な問題への対応力を高める不祥事防止のための研修会を実施。		
自己評価 (1～2月記載)	A	学習意欲を高め、意見を述べる力を身に付けさせる授業を展開することを目指し研修を進めた。	C

評価基準　A：具体的な活動がなされ目標を達成できた　B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	A	授業改善重点事項の検討、教科や学年に共通する研修テーマを設定し、生徒の力につながる授業づくりに貢献している。	C
自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策（学校評議員会終了後記載）	・校内外の研修会や講習会へ積極的に参加し、知識を活用できたことに成果を感じるとの評価を踏まえ、次年度も積極的な研修参加を働きかけ、支援していく。 ・今年度の授業改善重点事項を基に、各教科の授業の中や各種活動において、授業アンケート等で効果を確かめながら実践していく。		A

評価領域	情報視聴覚部

重点目標	・校内ＬＡＮの管理に努め、利用しやすい環境を整える。 ・各分掌・教科との連絡を密にして、情報教育の推進と情報機器の活用に努める。 ・総合学科の特色を地域に発信する環境整備を推進する。	P
現　　状	・校務支援システム、クラウド・NAS・Googleドライブなどによるファイル共有、デジタル採点システムなどが整備された。 ・新入生から個人のGIGAschool端末が導入された。	
具体的な目標	・業務系・GIGA school系校内ＬＡＮの継続的な管理 ・GIGA schoolとGoogle Classroomの授業・生徒把握への活用 ・学校HP等を利用した校内外への情報発信	
目標達成のための方策	GIGA schoolの管理と整備を行う。BYODによる個人端末の受け入れ手順を確立する。chromebookや電子黒板などの使用に関する技術的な支援を行う。授業や日常の活動にClassroomを活用することによるスキル向上を図る。	
具体的な取り組み状況 (1～2月記載)	BYODに関しては生徒の学校での運用等に関してもノウハウを蓄積している。Google Classroom等のサービスに関しても授業だけでなく各種調査や連絡にも活用している。	D
達成状況 (1～2月記載)	BYOD端末の落下等による破損・一時貸し出しは数件であり、貸与端末に比べると使用状況は良いと思われる。校務支援システム・すぐーる・クラスルームなどのサービスもインフラとして定着している。	

自己評価 (1～2月記載)	B	入学時に端末を購入してもらうことに関しては、設定方法など一部混乱もあったが、次年度に向けて経験が蓄積された。	C

評価基準　A：具体的な活動がなされ目標を達成できた　B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	B	端末は家庭の負担となるが、学習環境には必要なので責任をもって管理して欲しい。	C
自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策(学校評議員会終了後記載)	貸与端末から個人端末に移行することで、不注意による破損の申告は減っている。しかし、充電に関する認識不足で電池切れを起こしたり、端末自体を自宅に忘れてきたりという「個人所有に起因する問題」が見られるようになった。2027年には全学年が個人端末を使用することになるので、問題点を洗い出して対応を考える必要がある。		A

評価領域	農場部

重点目標	農業学習の実践の場として、農場実習や農場施設・設備の充実を図る。 また、地域との連携を図り、先進的な農場運営に努める。 ※サツマイモ（ﾆｭｰﾊﾞｲｵﾌｧｰﾑ）、水田（折林ﾌｧｰﾑ）等。 また、教員の知識・技能の向上の為、研修に参加する。	P
現　　状	作物：「ひとめぼれ」の生産。 野菜：砂地を利用した野菜栽培（サツマイモ等）。 草花：春の苗物、冬の鉢物の栽培。 研修：農場運営との関係で、研修に参加する機会を得ることが難しい。	
具体的な目標	作物：一等米の評価と食味Ａの評価。 野菜：サツマイモ栽培の労力削減。 草花：切り花の栽培。 研修：各部門等に関連する研修への参加。	
目標達成のための方策	作物：重点的に肥料管理を行い倒伏を防止する。 野菜：黒マルチ栽培で除草作業の軽減を実現する。 草花：切り花の試験栽培を行う。 研修：県教委、県農林部との連携を密にした事業を展開する。	
具体的な取組状況 (1～2月記載)	作物：4.8haの「ひとめぼれ」の作付け。夏場の溝切りと水管理の徹底、水田内の除草等を丁寧に行った。 野菜：サツマイモの黒マルチによる除草作業の軽減の工夫。リビングマルチの試験的な導入。 草花：切り花に着手し、ドライフラワーを作成した。 研修：園芸作物研修会（JA主催）、産業人材育成研修会への参加。	D
達成状況 (1～2月記載)	作物：「ひとめぼれ」が昨年に続き一等米の評価を頂いた。 野菜：黒マルチ栽培により、除草作業の軽減と販売経路の拡大により、廃棄サツマイモを減らすことができた。 草花：ハーバリウムの制作を試験的に行い、花材を自校でまかなえた。 研修：「成長産業人材育成」研修会では「農工連携」の取組方法など、現場で活用できる研修となった。	
自己評価 (1～2月記載)	A　作物・野菜部門で地域連携（折林ﾌｧｰﾑ、ﾆｭｰﾊﾞｲｵﾌｧｰﾑ等）を図ることができた。これにより実物を活用した授業展開が飛躍的に向上した。また研修では、「農工連携」を現場で発展的に活用する技能を学ぶことができた。これらのことを次年度にも活かしたい。	C

評価基準　A：具体的な活動がなされ目標を達成できた　B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	A　農場実習や地域との連携の取組が熱心になされ、その情報発信も西目高校の大きな強みとなっており、より実践的な農業や各種連携を体験できたと思う。	C
自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策（学校評議員会終了後記載）	・「作物や野菜、草花などの栽培は就農や趣味での楽しみであり潤いのある人生を送る糧となる。」等の意見から、今後も地域連携を深め、販売会などの活動を継続していく。あわせて、地域住民や保護者、中学生への発信力を高めるため、マスコミにも注目されるような魅力ある取組を展開していきたい。 ・「農業を学ぶ」以上に「農業で学ぶ」展開の授業を工夫していきたい。	A

評価領域	1年部

重点目標	1　基本的生活習慣の定着と、集団の一員としての規範意識の醸成を図る。 2　よりよい人間関係構築を目指して、他者に対する思いやりや協働性を育成する。 3　自己および他者や社会に対する理解を高め、主体的に進路選択しようとする態度を育成する。	P
現　　状	・明るく活発な生徒が多い。 ・場当たり的な対応や人任せの場面が見られ、集団の中で自分事として話を聞いたり考えたりすることが苦手な傾向がある。 ・地域や将来について、表面的な理解にとどまっている。	
具体的な目標	1　心身の健康の維持、時間や私物の管理など、自己管理能力を身に付けさせる。 2　あいさつを励行するとともに、学校生活において他者と協力して活動する機会を充実させる。 3　多様な教育活動を通して、自己の特性に対する理解や地域社会について学ぶ機会を充実させる。	
目標達成のための方策	・時間（朝学、授業）や期限（課題、提出物）を意識させる。 ・遅刻、欠席、スマホトラブルはゼロを目指す。 ・系列授業や「産業社会と人間」で活動や気づきをアウトプット（言語化）させる。	
具体的な取り組み状況 (1～2月記載)	・学年部会や朝の打ち合わせで生徒の状況や懸案事項を共有し、指導を強化するなど共通認識をもって指導に当たった。 ・ワークシートやレポートなどで活動の観点を示し、気づきや思考の深化を図った。	D
達成状況 (1～2月記載)	・提出期限や時間、私物の管理や清掃活動など指導を経て成長が見られた。長期休業明け等にだらしなくなる傾向にあるので継続的な指導が必要である。 ・体験的活動や行事を通して協働性や集団の団結力を向上させることができた。一方不用意、不注意による言動など精神的な未熟さが目立った。 ・地元企業に対する理解は進んだが、自己の適性と将来の社会人像を結び付けた進路意識の向上には至らなかった。	
自己評価 (1～2月記載)	B　担任副担任を中心とする支援、指導により生徒に高校生としての自覚と成長を促すことができた。	C

評価基準　A：具体的な活動がなされ目標を達成できた　B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	B　諸活動を通して人間関係の構築、自己の適性や将来の社会人像を結び付けた進路意識の向上を図って欲しい。	C
自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策（学校評議員会終了後記載）	・周囲に対する配慮ある言動、課題や自分の仕事に対する質の向上など、生徒自身の行動変容を促す働きかけを学年部全体で実践する。 ・生徒の進路希望を踏まえ、自己の適性や可能性に気づかせるような授業や体験的活動を通して進路意識の向上を図る。	A

評価領域	2年部

重点目標	・基本的生活習慣の定着を図り、社会で活躍する人材になる礎を築く。 ・自らの役割を理解し、主体的に活動する力を更に育む。 ・日々の学習に集中して臨み、基礎学力の更なる向上を図る。	P
現　　状	・礼儀正しく、しっかりと挨拶が出来る生徒が少ない。 ・思いやりの心を忘れず、他者と優しく接することが出来る。 ・日々継続して粘り強く学習に取り組む姿勢が不足している。	
具体的な目標	・自ら挨拶をしたり時間を厳守するなど、基本的生活習慣を身に付けさせることを徹底する。 ・学校生活の様々な場面で、自分に与えられた役割は何かを理解し、誠実に果たすことの大切さを理解させる。	
目標達成のための方策	・朝学習から帰りの清掃まで、時間厳守、他者への挨拶を欠かさず行うことを意識した指導を徹底して行う。 ・生徒の情報を学年部全体で共有し、個々に適切な役割を与えることで、責任を果たす喜びを実感させることで自己肯定感を高める。	
具体的な取り組み状況 (1～2月記載)	・副担任が中心となり、朝の打合せ後すぐに教室に向かうことで、時間を守って行動することを継続して指導している。 ・担任が生徒の個性を見極め、日々の学校生活や各行事で生徒に適切な役割を与え、その様子を学年部職員全体で共有している。	D
達成状況 (1～2月記載)	・副担任が毎朝教室に早く入ったことで、朝学習や授業等、時間を守って行動する生徒が増えてきている。 ・担任が生徒をよく観察し、自己肯定感が高まるよう指導したことで、授業や各行事を通して生徒に心の成長が感じられている。	

自己評価 (1～2月記載)	B	学年部職員全員が生徒のために真摯に業務に励んでいるが、挨拶を自分からしない生徒、時間を守れない生徒がいる。	C

評価基準　A：具体的な活動がなされ目標を達成できた　B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	B	先生方が生徒を成長させようと努力していることがよく分かった。	C

自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策(学校評議員会終了後記載)	学年部職員の努力を評価していただいて大変感謝している。次年度は最上級生として後輩の手本となり、進路目標を達成できるよう、規律ある学校生活を送らせることを目標として、学年部職員一丸となって指導していきたい。	A

評価領域	3年部

重点目標	・心と体を鍛え、規律のある生活ができる。 ・思いやりと協調性をもって周囲と人間関係を築くことができる。 ・語彙力を高め、将来の進路実現の基礎を身に付ける	P
現　　状	・体調不良で欠席する生徒が多い。 ・人間関係のトラブル絶えず、他人を尊敬できない。 ・朝学習で読書習慣が定着している。	
具体的な目標	・社会人として元気に挨拶ができるようになる。 ・学校行事等を通じ、他人を尊重し協力して取り組む姿勢を育てる。 ・進路意識をもたせるため、学校関係者以外の人と触れ合う。	
目標達成のための方策	・普段から積極的に生徒に声かけをし、信頼関係を構築する。 ・担任を中心とした個性あるクラス経営を実現する ・「新志芽学」で職業人としての考察を深めさせる。	
具体的な取組状況 (1～2月記載)	・年を越えずに進路を決定できる進路指導をする。 ・体調管理をおこない、新年度に向けて体調管理をする。 ・高校生活残りわずかな時間を有意義な生活をする。	D
達成状況 (1～2月記載)	・年を越えずに全員の進路実現化できた。 ・最後の定期考査に向けて自宅学習できた。 ・共通テストに向けて補習等の取り組みができた。	
自己評価 (1～2月記載)	A　・高校生として満足できる生活ができた。 ・新年度に向けて進路意識をもって生活できた。	C

評価基準　A：具体的な活動がなされ目標を達成できた　B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	A　早期に生徒全員の進路実現を達成した。アンケート結果からも、高校生活への満足感や充実感が伝わってきた。	C
自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策(学校評議員会終了後記載)	全担任先生方の指導のおかげで無事に高校を卒業することが決定した。外から見られて評価されるよう、後輩の模範になる生徒に成長して欲しいと常々思っている。	A

評価領域	国語科

重点目標	生徒一人ひとりが確かな読解力と自分の考えを的確に表現する力を身に付けられるよう支援し、自分の責任で、自分の考えを発信する姿勢を養う。	P
現　　状	タブレット端末等を利用して課題を調べたり答えを探したりすることには長けているが、時間をかけて読んだり書いたり、じっくりと考えて結論を導いたりすることが不得手である。語彙力や理解力の差が大きく、目標設定の照準化が難しい。	
具体的な目標	(1) 生徒一人ひとりが興味・関心をもって授業に取り組めるように、教材研究に努める。 (2) 的確な読解や表現ができるように基礎学力を高め、語彙力の習熟に努める。 (3) 読書を奨励する。	
目標達成のための方策	・意見発表やプレゼンの機会に慣れさせ、自らの考えで導き出した意見、提案に対して奨励し適切に評価する。 ・短文を書く練習からはじめて、最終的には比較的長めの文章を書くことにもチャレンジさせる。 ・模範解答自体の分析を通して、自らの解答と比較検討する習慣を身に付けさせる。	
具体的な取り組み状況 (1～2月記載)	・ＩＣＴを活用した意見交換や発表形式を継続的に取り入れている。 ・単元ごとに、ある程度の分量を書く課題や感想等を提出させている。 ・平日放課後や長期休業中の補習、進路希望に沿った個別指導等を実施している。 ・科内で、評価のあり方等の検討会を実施した。	D
達成状況 (1～2月記載)	・授業展開の方法や有効なＩＣＴ活用法は今後も継続して研究する。 ・授業アンケート（生徒）によれば、生徒自身の自己評価、授業に対する評価ともに数値が高く概ね満足できる結果である。	

自己評価 (1～2月記載)	A	生徒の能力や気質の変化に応じ、現在の取組を継続、発展させていく。	C

評価基準　A：具体的な活動がなされ目標を達成できた　B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	A	・生徒たちはタブレット等で情報を得るだろうが、読書や書類作成は社会人に必要なスキルとして身に付けてほしい。 ・行った取組に対し、生徒自身から高い評価を得られたことに成果を感じる。個人差は大きいだろうが、今後も自分の考えを表現する力を身に付けられるよう指導してほしい。	C

自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策（学校評議員会終了後記載）	・Googleフォームを用い他者の多様な視点に触れる機会を確保し、生徒が「何ができるようになったか」という自身の成長を実感できる仕組みが機能している。今後さらにスモールステップを積み重ねさせながら、自分の考えを根拠や具体例も含めて表現できるように、多様な表現機会を工夫し創出していきたい。 ・生徒主導の授業展開を充実させるために、授業のねらいを十分に理解させた上で、主体的な参加姿勢の育成をさらに強化していきたい。	A

評価領域	地歴・公民科

重点目標	(1) 基礎的・基本的事項の定着を図る。 (2) 生徒の主体性を重んじ、個の充実を図る。 (3) 現実の社会的事象について興味関心を抱かせる。	P
現　　状	・考査で得点することだけに意識が向かい、その考査でも選択肢がないと得点できていない。 ・深く学ぶことに興味をもつことができないでいる。	
具体的な目標	物事の背景など深く考える力を身に付けさせる。	
目標達成のための方策	・中学校の内容や、現代につながる話を結び付けて深く考えさせる。 ・ＩＣＴを活用し、社会的事象に関する興味関心を高める。 ・生徒との対話を活発に行い思考を深める。	
具体的な取り組み状況 (1～2月記載)	・中学校の内容を確認しつつ、社会的事象に関する興味関心を高め、現代につながる話を結び付けて深く考えさせた。 ・ＩＣＴの活用で課題の回収や生徒の評価を丁寧に行ったほか、授業に役立つ資料の提示を行った。	D
達成状況 (1～2月記載)	・中学校の内容確認で、つまづく生徒がおり苦戦したが、物事の背景や多くの社会的事象については、繋がりを感じさせることができた。 ・生徒との対話は成立しない場面がありつつも、授業の終わりには納得できていることが多かった。	
自己評価 (1～2月記載)	B　基礎力がない生徒が増えているものの、授業を通して深く考えることに触れさせることはできたと思う。今後は深い理解につなげていきたい。	C

評価基準　A：具体的な活動がなされ目標を達成できた　B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	A　生徒自身が深く考える力を重視して授業を進めることは貴重である。	C
自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策(学校評議員会終了後記載)	少子化に伴う入試定員割れの常態化が、生徒の学習意欲を減退させる要因の一つになっていると危惧している。物事の本質を深く考え、理解を深める学習は極めて重要だが、それと同時に、用語や年号といった基礎的な知識を確実に習得し、目に見える結果（得点）に繋げる指導も重視したい。「わかる」だけでなく「できる」という達成感を積み重ねることで、希薄になりがちな学習意欲を再構築し、学力の下支えを図りたい。	A

評価領域	数学科

重点目標	(1) 生徒一人ひとりが関心をもち、意欲的に参加できる授業を展開する。 (2) 学習習慣を身に付けさせ、基礎学力の定着を図る。 (3) 週末や長期休業の課題を工夫し、学力の向上を図る	P
現　　状	・授業では集中力が続かない生徒がいる。 ・家庭で学習する習慣がない生徒が多く、基礎学力が定着していない。 ・課題を課しても解答を写すだけだったり、提出できなかったりする生徒がいる。	
具体的な目標	・タブレットの活用や生徒が主体的に考える場面を取り入れるなど生徒が集中できる授業の展開方法を研究する。 ・課題の出し方を工夫し、学習習慣の定着を目指す。 ・課題の未提出者に対して学年部等の協力を得る。	
目標達成のための方策	・ＩＣＴを活用した授業展開や協議・活動的な場面を取り入れる。 ・書き込み式の問題集や週末課題、単元の小テストを複数回課す。 ・課題の提出状況について、学年部や部活動顧問と共有を図る。	
具体的な取り組み状況 (1～2月記載)	・授業アンケートの結果を踏まえ、協議、活動的な授業展開を行った。 ・週末課題、小テストを定期的に実施することができた。 ・課題の早期提出を促し、学年部と連携し未提出者リストを掲示した。	D
達成状況 (1～2月記載)	授業展開に関して、ＩＣＴ活用や他者の意見も共有する場面がまだまだ不足している。その他は概ね達成できた。	

自己評価 (1～2月記載)	B	課題提出は良好であるが、考査などの成果につながっておらず、意欲的に学習に向かう点では課題が多い。	C

評価基準　A：具体的な活動がなされ目標を達成できた　B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	B	理解が追いつかないままだと「数学嫌い」が量産される原因になる場合があると思う。学力向上につながる課題の在り方について、今後も検討してほしい。	C
自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策(学校評議員会終了後記載)	第１回授業評価において「自分の考えを文章でまとめる時間がある」の項目が極端に低い評価となった。数学という教科の特性上、低評価になりやすい傾向はあるものの、学力向上のためには「意見共有」や「記述力の育成」が不可欠であると考え、重点的に対策を講じてきた。その結果、第２回授業評価でも同項目の評価は依然として全項目中最低ではあるものの、前回からの上昇率は他項目を圧倒する数値となり、これまでの取組の成果が現れたものと捉え、今後も継続していきたい。		A

評価領域	理科

重点目標	1　自然の事象・現象について探究し、考察やデータを元に結果をアウトプットする力を身に付ける。 2　予想や仮説を基に、見通しをもって観察、実験に取り組み、実学を通し理解を深める。 3　実験観察を自身の生活と結び付けて考え、ＩＣＴを利用し表現する力を身に付ける。	P
現　　状	1　知識を言語化する力が不足している。 2　単元に沿った実験観察及び演示実験を実施している。 3　電子黒板等、視聴覚機器を利用している。classroomを利用し、課題の提出や添削を行っている。	
具体的な目標	1　身の回りの事象と授業の内容を関連付け、生活に応用されている技術を理解させる。 2　実験観察から座学の内容を実学として身に付ける。 3　ＩＣＴ機器を活用し、実験データをまとめる技量を高める。	
目標達成のための方策	1　ＩＣＴ機器を活用し、質問を精選することで生徒が主体的に動く授業展開を心掛ける。 2　教材の研究開発を行い、視覚的、体験的に理解を深めさせる。 3　生徒、教員がＩＣＴを活用する能力を高め、実験データ等のやりとりを通し、細部まで効果的な学力向上を推進する。	
具体的な取組状況 (1～2月記載)	1　電子黒板、クラスルーム等、ＩＣＴ機器を用いて効率の良い授業展開が出来た。 2　実験を通し、体験的な内容を行った。 3　実験等では、考察を振り返るまでには至っていない。	D
達成状況 (1～2月記載)	単元によっては生徒に主体性が見られ、座学と実験の相補性もとれていた。問題演習、小テストの実施等により、きめ細かな展開を図る必要があった。	
自己評価 (1～2月記載)	B　全体を通して目標は達成することができたが、生徒の習熟度と比較すると目標設定が効果的であったかは疑問が残る。個々の生徒に対する柔軟な対応が求められる。	C

評価基準　A：具体的な活動がなされ目標を達成できた　B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	B　身の回りに出現する事象・現象を理解することは、将来の生活にも密着することが多いので、十分な理解が得られて欲しい。	C
自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策（学校評議員会終了後記載）	・本校における目標は概ね達成できているとの前向きな意見が多かった。一方で生徒が主体性をもち、理解へと繋げられる工夫が課題である。教科書の内容をカリキュラム通りに進めることが基本ではあるが、単元によっては小、中学校の復習も兼ねた学習も必要である。 ・５教科及び専門教科との連携を踏まえた西目高校ならではの横断的な学習活動を模索していきたい。	A

評価領域	保健体育科

重点目標	各種運動の合理的な実践を通して、運動への興味関心や運動を主体的に行う能力などの生涯スポーツの基礎的な資質を養う。	P
現　　状	運動に興味をもち積極的に取り組もうとする生徒が男女問わず増えている。技能の向上を図り、「できる」喜びを味わわせることで運動習慣の定着につなげたい。	
具体的な目標	自ら運動の計画を立て、グループごとに主体的に実践し、振り返る活動をとおして、運動に主体的に取り組む能力を育て、生涯スポーツの基礎的な資質を身に付けさせる。	
目標達成のための方策	・主体的に振り返りの活動を行えるよう学習カードを工夫する。 ・運動の苦手な生徒に対して、支援の方法を工夫する。 ・タブレットを活用した振り返り、技能のポイントなどの情報収集を充実させる。	
具体的な取組状況 (1～2月記載)	・思考の過程を整理しやすい学習カードを作成するよう心がけている。 ・タブレットを活用した動画による即時フィードバックを継続して取り入れている。	D
達成状況 (1～2月記載)	・思考の過程を整理する学習カードにより効果が見られる生徒もいるが、そうでない生徒も一定数いる。理解の遅い生徒への配慮が必要。 ・動画による即時フィードバックは効果的であると感じている。	

自己評価 (1～2月記載)	B	動画による即時フィードバックで技能の向上が見られることにより生徒が意欲的に取り組む様子も見られた。	C

評価基準　A：具体的な活動がなされ目標を達成できた　B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	B	・より良い人生を送る上で、健康は必須であり、日頃から意識し運動の習慣を身に付けてほしい。 ・動画によるフィードバックなど意欲的に取組が見られる。	C
自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策(学校評議員会終了後記載)	・生涯スポーツの基礎を培う上で運動に興味・関心をもつ生徒を増やすために、日々、技能の高まりや成功体験を味わうことのできるような授業をしたい。 ・次年度の重点事項として振り返りの活動を充実させ、自己の技能の高まりを確認する機会を増やしたい。		A

評価領域	芸術科（音楽・美術・書道）

重点目標	芸術の諸活動を通して生涯にわたり芸術を愛好する心情を育むとともに、感性を高め豊かな情操を養う。	P
現　　状	技法を学び表現能力が向上することに意欲がある生徒が多い。ためらいなく発表ができ、お互いの表現を楽しんでいる生徒が見られる。 一方、理解力の伴わない生徒には個別の指導を進めている。	
具体的な目標	・自分らしい表現を「探究的に進める」ことができる授業内容を研究し実践する。 ・科目間連携を図りながら、複合的・横断的学習を実現する。 ・生徒が互いの表現を認め合い、芸術を愛好する雰囲気を作る。	
目標達成のための方策	・生徒個々のレベルに合わせた、幅広い表現方法の指導。 ・生徒相互が認め合い楽しめる雰囲気をつくる。 ・少人数、選択性の良さを生かし、志望を生かす指導を進める。	
具体的な取り組み状況 (1～2月記載)	・希望、適性に沿った科目選択のための方法を検討、実施した。 ・「芸術文化鑑賞」は幅広い作品や文化を鑑賞し、作品化や発表を通して周りの生徒と関心や感動を共有する体験を進めた。	D
達成状況 (1～2月記載)	・音楽、書道、美術の３科目を体験して芸術Ｉの選択を行い、生徒の興味関心を引き出す授業展開に繋げた。 ・２、３年教養文化系列の生徒は各科目の能力が向上し、個性的な制作、発表を進め、進路に繋がる生徒も見られた。	

自己評価 (1～2月記載)	A	表現することを楽しんでおり、今後も芸術的な興味関心を深めることが期待できる。	C

評価基準　A：具体的な活動がなされ目標を達成できた　B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	A	生徒が自ら楽しんで芸術に触れることは大変素晴らしい成果で、人生を潤いあるものにしてほしい。	C

自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策（学校評議員会終了後記載）	・「音楽・書道・美術の体験から芸術Ｉを選択できる環境が素晴らしいと思った」という評価にあるように、今年度の選択方法を今後も進めて行く。 ・保育士や美術制作の専門学校進学など、生徒の進路の要望に応えられる、カリキュラムや個別指導の充実を進めたい。	A

評価領域	英語科

重点目標	1　基礎事項の定着を図り、進路に応じた学力の向上を図る。 2　英語で積極的にコミュニケーションを図る態度を育成する。	P
現　　状	中学校の既習事項充分に定着していない生徒が多いが、音読やペアワークなどの言語活動に意欲的に取り組んでいる。こうした現状を踏まえた効果的な学習活動を提供することで基礎学力の向上に期待がもてる。	
具体的な目標	1　間違いを恐れずに自ら意欲的に英語で発信する力を身に付けさせる。 2　基礎学力の定着を図るため、計画的に週末課題を与える。 3　実用英語技能検定受験を奨励することで自ら学ぶ意欲を高めさせる。	
目標達成のための方策	1　各レッスンのテーマに応じたスピーキング活動を定期的に行うことで間違いを恐れず英語を話すことの楽しさを体感させる。 2　英文法のテキストを活用し、既習事項の定着を図る。 3　実用英語技能検定の問題演習を授業内で定期的に行うことで資格取得への意欲を喚起する。	
具体的な取り組み状況 (1～2月記載)	1　クロムブックを活用し個々がスピーキングを録音し提出させている。 2　週末課題として英文法テキストを活用して担当教員が確認している。 3　選択問題や会話文問題など、短時間で取り組むことが出来る問題を演習として継続して行っている。	D
達成状況 (1～2月記載)	1　自ら話す英語を音として聴くことで、一層の上達を目指して意欲的にスピーキングに取り組む生徒が増えた。 2　既習事項の定着が不十分な生徒には、各学年の担当教員が個別指導をするなどして対応している。 3　問題演習を定期的に行っているが、資格取得を目指そうとする生徒の数は増えていない。	
自己評価 (1～2月記載)	B　英語科教員間で情報共有を図りながら、英語を学ぶ意欲を高める取組を日々実践していく必要がある。	C

評価基準　A：具体的な活動がなされ目標を達成できた　B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	B　これからも工夫を凝らして生徒が英語を学びたいと思う授業をお願いしたい。	C
自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策(学校評議員会終了後記載)	英語を苦手とする生徒は多いが、前向きに授業内の活動に取り組んでいる。その前向きさをより一層高めることが英語力の向上に繋がると思う。英語科職員一丸となって生徒のために努力をしていきたい。	A

評価領域	家庭科

重点目標	家庭生活に関する基礎的な知識と技術を体験的に習得させ、豊かな家庭生活のあり方について理解を深めさせるとともに、これからの社会に対応できる能力と態度を育てる。	P
現　　状	道具や食材の扱い方など基本的な内容を始めとし、生活経験に個人差が見られる。自ら課題を発見したり、解決したりすることは難しいが、実習など体験的な学習に対しては意欲的に取り組む生徒が多い。	
具体的な目標	普通教科「家庭」：授業で学んだことを普段の生活で実践し、よりよい生活につなげようとする態度や能力を育成する。 専門教科「家庭」：資格取得指導に力を入れ、基礎的な知識・技術の習得を活用できる応用力を身に付ける。	
目標達成のための方策	・実生活につながるよう、事前事後指導を含め、実習を充実させる。 ・家庭科技術検定（食物調理・被服製作・保育）の合格率向上を目指し、指導を工夫する。	
具体的な取り組み状況 (1～2月記載)	家庭基礎では学習内容を踏まえて、ホームプロジェクトを実施した。専門教科では、コンテストへの応募やオリジナルパンの販売に取り組み、アイデアを形にした。事前学習として、DVDを活用したり、手本を見せたりして実習に臨み、即時評価しながら、検定合格を目指した。	D
達成状況 (1～2月記載)	ホームプロジェクトでは、食事づくりをして実生活につなげている生徒が多かった。コンテストなどの企画に積極的にアイデアを出す様子も見られた。検定の合格率は、食物２級（90%）が及ばなかったものの、被服（和服）・食物は、準１級を含め100%であった。	

自己評価 (1～2月記載)	A	検定を実施している科目では力がついたと実感する生徒が多い。検定以外の取組や企画で一定の成果があった。	C

評価基準　A：具体的な活動がなされ目標を達成できた　B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	A	実習や検定への積極的な挑戦により、生徒は着実に力を付けている。企画への提案力も向上しており、これらは実生活に直結する成果である。今後も性別にかかわらず、一人の自律した個人として、豊かな家庭生活や社会を築く主体性を養ってほしい。	C

自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策（学校評議員会終了後記載）	・生徒に合わせた筆記試験対策を行い、家庭科技術検定の合格率向上を目指す。 ・コンテスト等、外部企画の活用を図る。	A

評価領域	情報科

重点目標	情報に関する科学的な見方・考え方を働かせ、情報技術を活用して問題の発見・解決を行う学習活動を通じて、問題の発見・解決に向けて情報と情報技術を適切かつ効果的に活用し、情報社会に主体的に参画するための資質・能力を育てる。		P
現　　状	情報伝達の必要性を考え、理解する上で技術的な部分を学んでいる。		
具体的な目標	(1) 情報と情報技術及びこれらを活用して問題を発見・解決する方法について理解を深め技術を習得するとともに、情報社会と人との関わりについての理解を深めるようにする。 (2) 様々な事象を情報とその結び付きをして捉え、問題の発見・解決に向けて情報と情報技術を適切かつ効果的に活用する力を養う。		
目標達成のための方策	小グループでの活動によって、お互いに話し合うことで、苦手な部分も克服できる。		
具体的な取組状況 (1～2月記載)	・個々がもっている機器で自宅学習をする。 ・個々がもっている苦手な学習を克服する努力をする。 ・小グループを活用し、学習成果が上がることに取り組んだ。		D
達成状況 (1～2月記載)	・個々の学習意欲を高め、クロームブック等を利用して自宅学習できた。 ・小グループの活動を通じて苦手な内容を確認できた。		
自己評価 (1～2月記載)	B	・概ね例年通りの学習成果が見られた。 ・次年度に向けて新たな課題をもって取り組んでいく。	C

評価基準　A：具体的な活動がなされ目標を達成できた　B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	B	現代の情報社会としても必要不可欠なスキルだと思う。生徒自身もそれを正しく収集、理解、活用できるような教育を今後もお願いしたい。	C
自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策(学校評議員会終了後記載)	情報化社会において、生徒に何を伝えるのか、生徒を導く難しさは増している。本教科は教師自身も常に知識とスキルの刷新が求められる分野である。生徒の模範となるよう、私たちが絶えず自己研鑽に励み、最新の技術や知見を習得していく必要がある。		A

評価領域	農業科

重点目標	農業に関する基礎的な知識や技能を座学と体験的な学習の両面を通して習得させ、農業クラブ活動や地域貢献事業に参加しながら個々の進路目標の確立と進路実現へと繋げる。	P
現　　状	農家出身者が少なく、農業後継者としての入学者も少ない。小学生の頃の農業体験や体験入学等が選択理由となっている生徒が大半で、農業を将来的な職業と意識している生徒が非常に少ない状態ではある。しかし、確実に農業科学系列の希望者は増えている状況にある。	
具体的な目標	(1) 農業クラブ活動各種大会への積極的な参加。 (2) 地元小学校への「野菜の出前講座」や「ゆりほんマルシェ」等への積極的な参加（産学官連携等）や企業連携を行う。 (3) マスコミへの積極的な発信を行い、地域への認知を図る。	
目標達成のための方策	(1) 「意見発表会」や「家畜審査競技会」への参加の為の補習等を行う。また地元企業等との連携を図りながら、各種発表会への教材へと繋げる。 (2) 地元企業等との繋がりを活かした授業展開を行い、地域の資源の活用や人材の活用を積極的に行う。 (3) 広報、CATYV、新聞社、テレビ局への投げかけを積極的に行う。	
具体的な取組状況 (1～2月記載)	(1) 「意見発表」や「家畜審査競技会」の指導を計画的に行った。 (2) 地元小・中学校との学習連携を密にし、企業連携も多数行った。 ※野菜出前講座、花苗定植等の連携事業など、様々な地域連携事業（27事業を企画・実施） (3) 広報、CATYV、新聞社、テレビ局への情報提供（18事業）。	D
達成状況 (1～2月記載)	(1) 「家畜審査競技会」では肉用牛の部２・３位入賞、乳用牛の部３位入賞を数年果たした。「意見発表」は２年連続出場できたので、今後は入賞を目指した指導をしていきたい。 ※農業技術検定３級４名合格 (2) ①農場14事業実施（マスコミ発信６事業） ②水田部門５事業実施（マスコミ発信９事業） ③野菜部門５事業実施 ④草花部門３事業実施（マスコミ発信３事業） (3) 広報(4)、CATYV(2)、新聞社(9)、テレビ局(3)に取り上げられた。	
自己評価 (1～2月記載)	A　生徒達の活躍の場を増やし、発信することが出来た。次年度は更に取り組み方を工夫し、上位入賞を目指したい。	C

評価基準　A：具体的な活動がなされ目標を達成できた　B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	A　目標達成のための計画や取組が的確である印象で、体験的な学習や様々な取組への参加が生徒の達成感に繋がっている。	C
自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策（学校評議員会終了後記載）	・「農家の出身者は年々減っていくが、野菜や米を育てる技術を学んで、これからの農業を更に発展させて欲しい」等の意見からも、非常に地域に期待されていると感じている。今後も新しい取組を地域に発信しながら、農業という角度からも地域に信頼される学校を作り上げていきたい。 ・「農業教育はエンターテイメントだ」という取組を作り上げる工夫を更にしていきたい。	A

評価領域	工業科

重点目標	地域振興局と由利建設業協会と地域との連携を密にし、明確な進路意識や職業観の育成を目指し、工業（土木系）への積極的な進路選択ができるようにする。	P
現　　状	昨年は公務員１名であった。今年度は６名の希望者がおり、県外の公務員を希望している生徒もいる。地元定着を見据えて、１年次から目標を定めて着実に学力を高める必要がある。	
具体的な目標	・公務員希望者全員第一希望への合格。 ・授業を展開しながら国家試験合格率を全国平均より高い測量士補40％、２級施工管理技術80％の合格率の達成を目指す。 ・ジュニアマイスター取得者の増加。	
目標達成のための方策	・資格取得のために授業の内容を１年次のスタートから取り入れることで生徒のモチベーションを上げていく。 ・地域振興局と建設業協会連携した事業を実施し体験させる。	
具体的な取り組み状況 (1～2月記載)	・３年生の就職希望者との面談を実施する。地域行事の測量大会や現場見学を年間で２回以上実施できた。公務員由利本荘市土木、国土交通省への合格を達成することができた。 ・継続して中学生体験入学での建設機械の操縦を取り入れた。	D
達成状況 (1～2月記載)	・測量士補が１名合格し、ジュニアマイスターブロンズを受賞することができた。今後も更に新しい仕掛けを試みていきたい。 ・公務員が３名合格することができた。	

自己評価 (1～2月記載)	B	国家資格である測量士補、施工管理技術検定の合格を目指し継続して取り組みたい。ゴールド受賞を増やしたい。	C

評価基準　A：具体的な活動がなされ目標を達成できた　B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	B	昨年に引き続き測量士補合格者を出し、今後も頑張って欲しい。	C

自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策（学校評議員会終了後記載）	・地元の建設や測量会社では、ほとんど新人が入ってこないと嘆いており、地域の会社への就職を増やして欲しいという声がある。建設業界では資格者・技術者の育成は急務であると感じており、高校で取得した資格や技術を卒業後に活用させたい現状がある。 ・就職や資格取得について具体的な目標を設定し、今後も地域の産業をを支える人材の育成に努めてまいりたい。	A

評価領域	商業科

重点目標	商業の見方・考え方を働かせ、実践的体験的な学習活動を行うことなどを通して、ビジネスを通じ、地域産業をはじめ経済社会の健全で持続的な発展を担う職業人として必要な資質・能力を育てる。	P
現　　状	・実践的体験的な学習活動に対し、お互いに協力して取り組んでいる。 ・各自のレベルにあった検定目標を立て、合格しようとする姿勢がうかがわれる。	
具体的な目標	・実践的体験的な学習活動の問題解決に対して、主体的に取り組む姿勢を育む。 ・各種検定試験に合格し、上級の資格取得に挑戦する態度を養う。	
目標達成のための方策	・生徒の主体性を尊重しつつ、要所で適切な指導をする。 ・生徒一人一人の習熟度を見極め、合格圏内の受験級を適切にアドバイスし、必要に応じて放課後の補習を実施する。	
具体的な取組状況 (1～2月記載)	・外部機関や地域と連携を図り、実践的体験的な学習活動の機会を作った。 ・生徒の実情に合わせ、各種検定の種類によって主催団体を変更するなどして、資格取得に挑戦する意欲向上に努めた。	D
達成状況 (1～2月記載)	・実践的体験的な学習活動は主に２・３年生が取り組み、職業人として必要な資質や能力が身に付いた。 ・学年によって検定合格に対する努力に差を感じるものの、概ね目標とする受験級の実力はついてきた。	

自己評価 (1～2月記載)	B	商業科内で達成目標や生徒の情報の共有を図り、組織として個に応じた指導ができた。	C

評価基準　A：具体的な活動がなされ目標を達成できた　B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	A	資格検定にチャレンジしながら、実践的・体験的な学習で商業の資質や能力がを身に付いた。	C
自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策(学校評議員会終了後記載)	・科内で各種検定不合格者の苦手分野を分析し、理解度を高める指導方法を共有する。各種検定時期に合わせた模擬問題等の宿題を課し、過去問を繰り返すことで難易度の高い問題に対応できる力を身に付け、合格率を上げていきたい。 ・外部機関や地域と連携を図り、起業体験プログラムへの参加やＢｕｓｙＢｅｅの活動を通して、ビジネスに関わる職業人として必要な資質・能力を育む努力を継続したい。		A